# 2015年3月研究会報告

# 「KWがZIを超える日」

会員番号0723　　湯淺 謙

KW（Kamerawerkstätten）、カメラ・ヴェルクシュテッテンは、第一次世界大戦(1914-1918)直後の1919年に設立された有限会社である。創業者は、1915年に小さなカメラ工場を始めたパウル・ グーテ(Paul Guthe)とベノ・トルシュ(Benno Thorsch)の二人である。パテント・エッツイ(1920)、ピロート(1931)で成功し、1935年には120フィルム用一眼レフ、ピロート6を送り出している。

好事魔多し、ユダヤ系の創業者二人は、ナチスの迫害を恐れ、ドイツを離れる決意をする。代わって、事業を引き継いだのはチャールズ・アドルフ・ノーブル(Charles Adolf Noble)で、第二次世界大戦直前の1938年のことである。彼はアメリカ市民である。

35mm一眼レフの将来性に気づいたノーブルは、1939年ライプチッヒ春の見本市に、プラクティフレックスを発表する。設計は、アロイス・ホーアイゼル（Alois Hoheisel）。

1936年ライプチッヒ春の見本市で発表されたイハゲーのキネエクサクタに続く快挙である。1926年創立のツアイス・イコンがジュンタックス（Syntax）のプロトタイプを発表するのは翌1940年のことであるが、アイレベルファインダーだ。

1939年9月、第二次世界大戦が勃発する。KWは軍需産業に指定されたお陰で、カメラの製造は続けられる。1941年のライプチッヒ春の見本市には、スローシャッター付のⅡ型を発表するが、試作に留まる。

金属クロームが軍需に回され、トップやボトムがクロームメッキの代わりに塗装されたモデルや、エプロンやマウントリングを黒色塗装した個体もある。プロトタイプを除き、ノブの形やフィルムカウンターの違いなどで、リヒァルト・フンメル(Richart Hummel)は5モデル、アレクサンダー・シュルツ(Alexander Schulz)は11モデルと分類しているが、ここでは一括してⅠ型としておく。

1945年5月7日、ドイツは連合軍に対し無条件降伏し、ヨーロッパでの戦闘は終結する。米英ソの三国首脳は、2月4日のヤルタ会談で、ドイツの分割統治など、戦後処理という分捕り

プラクティフレックスⅠVer. 3(Alex)　073(Hummel)
最初の量産モデル、1939年に900台製造された。
確認されているボディ番号は12xx～17xx 。

プラクティフレックスⅡVer. 13(Alex)
（Hummelには記載なし）
最初のⅡ型量産モデル。1947年　製造台数不明。確認されているボディ番号は0403xx, 0423xx。プラクティフレックスの文字種はⅠ型と共通だが、プレスは別物でAlexのVer. 14以降Hummelの079と共通。

プラクティフレックスⅡVer. 16(Alex)　080(Hummel)
M40からM42にマウントを変更したモデル
M40に比べM42マウントはフランジバックが長いのでマウントが飛び出している。
1948年頃の試作と思われるが、詳細は不明。確認されているボディ番号は0656xx。この番号はVer. 15(Alex)のボディ番号の範囲に含まれる。

協定を結んだ。狙うのは、フォン ブラウン率いるロケット技術と、カール・ツァイス財団の光学技術である。アメリカ軍は、ソ連軍が到着する前に陣取りを済ましておく必要があった。いずれも、ソ連が分割統治する約束の地域に存在するからだ。

日本でも、京都や奈良はアメリカ軍の爆撃を免れたように、イエナのカール・ツァイス財団と関連工場はほぼ無事だった。壊すより技術やノウハウを戦利品として持ち出す方が得策と方針を変更したからだ。アメリカ軍がイエナに入ったのは4月13日で、ソ連に引き渡す日は7月1日と決められた。まだ二か月半の余裕があると楽観していたが、アメリカ軍が考えていたよりも膨大なシステムで、西側への移転はとても困難だとの結論になった。

『我々は頭脳を獲る』と宣言し、カール・ツァイスから84名、ショットから41名の研究者や技術者を、家族ともども西ドイツのアメリカ軍占領下であるハイデンハイムに移送する。6月24日のことである。これにより、カール・ツァイス財団の本拠地が二か所に存在する結果を招き、長期にわたりその正当性と工業所有権や意匠権を東西で争う源となった。

KWは中小のカメラメーカーだから、略奪の対象にはならなかった。ソ連は、戦後賠償の対象としてKWにカメラ製造を命令する。しかし、レンズは、カール・ツァイス イエナ製のビオターやテッサーが主力である。ノーブルは、ソ連軍の許可を取ってイエナに赴くが、7月5日、ノーブル親子は捕らえられる。いずれ国有化を図る時に、アメリカ市民が経営権をもっていることが邪魔になることを見越しての処置だったのだろう。

1946年11月18日、KWは没収されザクセン州の所属となり、産業管理局OPTIKの管理下に入る。

イハゲー・カメラヴェルクは、なぜ国有化されなかったのか。オランダ国籍のヨハン・シュティーンベルゲン(Johan Steenbergen)がオランダ資本で設立した企業だったからである。ドイツは連合軍側についたオランダの資産を接収したかったが、シュティーンベルゲンがドレスデンにおけるオランダ領事であったため簡単には進められなかった。しかし、シュティーンベルゲンの妻はユダヤ人だったので、ナチスの迫害を避けるため、1943年に亡命している。

戦後、ソ連軍はイハゲーを接収しようと試みる。しかし、オランダの軍事顧問団が、ドイツにおける連合国共同管理委員会に訴え、オランダの所有物であること証明したので、イハゲーは国有化を免れる。

ツァイス・イコンは、ドレスデンに4つの工場を持っていたが、2月13日の大空襲で、イカ工場の8割、エルネマン工場は4割を失った。

イカ工場は軍需産業の中心であり、エルネマンには通信機工場があったからだと現地で聞いた。モニュメントであるエルネマンタワーは健在で、カメラ、キネ、タイプライターなど機械製品の展示館となっている。

ツァイス・イコンの幹部は、ソ連軍がドレスデン工場を接収することを知り、本社機構をドレスデンからシュツットガルトに移すことを決め、1948年3月3日に戦後初の株主総会を開催して本案を決議した。ツァイス・イコンの法人格がAktiengesellschaftつまり株式会社だったからできたことである。

コンタックス S ボディ番号885
最初期型の一つで、シャッター速度設定ノブが円盤形である。シャッター速度が得られず、1/25が1/20に、最高速の1/1000が省略されている。1/250は残されているが、後に1/200に変わり、1/1000が復活する。
Hummelの分類はAlexによって否定された。

エクサクタ バレックス IIa
アイレベルとウェストレベルとが交換できるファインダーシステムを採用した一眼レフがエクサクタ・バレックスシリーズ。1950年から1967年までに約44,000台が生産された。写真は1956に製造されたⅡaの初期型。

ドレスデン工場は、4月17日、企業買収が法的に可能となり、7月にはメヒャーニク・ツァイス・イコンVEBドレスデンとして再出発する。しかし、本社機構は、シュツットガルトに移してあるので、株式会社は没収されていない。東と西とどちらが本物かという議論は、ツァイス・イコンAGに関しては無意味で、西の勝ちである。カール・ツァイス財団の東西問題とは、次元が異なることをご理解戴きたい。

さて、KWに戻ろう。ツァイス・イコンからKWに移ったジークフリート・ベームは、早速プラクティフレックスの改良に取りかかる。というよりも次世代35mm一眼レフの新設計を開始する。目標は、レンズマウントの改良とシャッター範囲の拡充だ。キネ・エクサクタは、12～1/1000秒とスローが充実しているし、レンズマウントも専用のバヨネット式だ。明るいレンズや長焦点レンズを取り付けるためには、M40という口径は小さすぎる。真鍮プレスのエプロンにネジ止めされたマウントでは、大型レンズの取り付けには強度不足する。とはいっても、一眼レフはエクサクタとプラクティフレックスしかない。エクサクタマウントは、口径38mmなので対象外だし、新たな規格を提案しても、レンズメーカーが対応してくれるとは限らない。悩ましいところである。また、旧態依然としたエヴァーセット式のミラー回動では、スローシャッター導入には不向きだ。ストロークの長いエヴァーセットでは手ぶれの原因になるし、シャッターが作動中、つまり露光中でも指を離すとミラーがおりて光路を遮ってしまう。

ベームは、この二つの要求に応えるボディを設計する。跳ね上げ式のミラーは前例がある。スプリングを逆に効かせてミラーを上死点におき、フィルム巻き上げ時にミラーを引き下げて下死点のフックに引っかけておく。シャッターストロークの最初の段階でフックを蹴飛ばせばミラーは跳ね上がる。次のストロークでシャッター幕を開放すればよい。ツァイス・イコンのイカ工場で、コンタックスSの開発に携わっていたベームにとってはここにたどり着くのは必然と言える。

レンズマウントについては、1946年に開発済みのコンタックスSに採用されているM42はどうだろう。古巣のイカ工場やM42レンズの供給元に聞いてみれば情報はとれる。問題は、デリバリーの時期と数量確保にある。開発したツァイス・イコンをさしおいて安定供給を求めるのは無理であろう。また、新しいマウントの開発も捨ててはいない。

たどり着いたのはホーアイゼルのⅠ型である。エプロンにマウントを取り付けたのが間違いで、マウントとエプロンを分離して、別々にボディに取り付ければよい。マウントの径やフランジバックの変動に対しては、マウント部で吸収すれば解決する。

プラクティフレックスⅡ型では、この方法を採用し、M40マウントでスタートし、M40の在庫が切れた時点でM42に切り替えている。しかし、中古市場には出回っていない。エプロンもM40用を加工したもので、量産されたものとは考えられない。しかし、たった一台のサンプルで全体を語るのはやめておこう。この構造は1950年に発表された第三世代のプラクティフレックス/プラクティカ、1955年に発売の第四世代プラクティカにも継承されており、しかも互換性があって交換可能である。プラクティカにM40のレンズを取り付けて試写することも可能である。

1954年、VEBツァイス・イコンは、キネ部門を残しカメラ部門であるオプティーク カメラズを分離してKWに統合させる。従ってコンタックスE以降の製造会社はKWであって、ツァイス・イコンではない。その証拠に、EあるいはFシリーズにはツァイス・イコンの社章であるレンズマークが消え、代わって、KWの社章であるエルネマンタワーが輝く。

ジークフリート・ベームは、ついに東ドイツにおけるカメラメーカーの頂点を極めたのである。

添付した表は、研究会で山前幹事からのご指示により制作したもので、これをベースにして、当時の世界情勢と東ドイツのカメラメーカーとの関連を垣間見て戴ければ幸いである。

以上

| 年 | 月　日 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1912 | 05 /13 | イハゲー設立 |
| **1914** | | **第一次世界大戦勃発** |
| **1918** | | **第一次世界大戦終結** |
| 1919 | | カメラ･ヴェルクシュテッテン(KW)設立 |
| 1926 | | ツァイス･イコン設立 |
| 1936 | 03 | イハゲー、キネ･エクサクタをライプチッヒ春の見本市で発表 |
| 1938 | 04 /02 | チャールズ・アドルフ・ノーブル KWを取得 |
| 1939 | 03 | プラクティフレックス、ライプチッヒ春の見本市で発表 |
| | **09 /01** | **第二次世界大戦(欧州戦線)勃発** |
| 1940 | 09 /02 | ツァイス･イコン、ジュンタックスのプロトタイプを実用新案登録 |
| 1945 | **02 /04** | **ヤルタ会談。アメリカ、イギリス、ソ連の首脳が、ドイツ占領後の分割統治など戦後処理決定** |
| | **05 /07** | **ドイツ軍無条件降伏。第二次世界大戦(欧州戦線)終結。** |
| | 06 /24 | カール･ツァイスから84人、ショットから41名の研究者･技術者をハイデンハイムに拉致 |
| | **07 /01** | **西側とソヴィエト連邦の分割統治スタート** |
| | 07 /05 | KWのノーブル親子がソ連軍により拘束 |
| 1946 | 01 /06 | ジークフリート・ベーム、ツァイス･イコンからKWへ転籍 |
| | 11 /18 | KW ソ連軍に没収され、ザクセン州に帰属 |
| 1947 | 09 | KW 第二世代のプラクティフレックス発表、ボディシェル マウント部新規設計、ミラー跳ね上げ機構導入、<br>設計はベーム |
| 1948 | 03 | ツァイス･イコン(ZI) ライプチッヒ見本市でコンタックスＳ発表 |
| | **06 /24** | **ソ連軍によるベルリン封鎖始まる** |
| 1949 | 02 | イハゲー キネ･エクサクタⅡを発表、ペンタプリズム搭載可能 |
| | **05 /06** | **ドイツ連邦共和国(西独)臨時政府成立** |
| | **05 /12** | **ソ連軍によるベルリン封鎖解除** |
| | **10 /07** | **ドイツ民主共和国(東独)成立** |
| 1950 | 02 | イハゲー、エクサクタ ･ヴァレックスを発表、 ファインダーが交換可能 |
| 1950 | 03 | KW 第三世代のプラクティフレックス=プラクティカ ライプチッヒ春の見本市で発表。<br>スローシャッターの追加。Ｍ４２マウント。設計はベーム |
| 1951 | 10 | KW 第三世代にシンクロ接点追加、カメラ名にFXを追加する。 |
| 1952 | 03 | ツァイス･イコン(ZI) コンタックスD/ペンタコン発表 |
| **1952** | **05 /06** | **ドイツ連邦共和国(西独)、米英仏とボン協定に調印。占領状態を終了主権を大幅に回復** |
| **1953** | **05 /28** | **ソ連ドイツ民主共和国(東独)を民政移管** |
| 1954 | | ＶＥＢツァイス・イコン、オプティーク・カメラズを分離してKWに統合 |
| | **03 /24** | **ソ連 ドイツ民主共和国(東独)への主権許与を発表** |
| 1955 | **05 /05** | **ドイツ連邦共和国(西独)　パリ協定で主権回復** |
| | 08 | KW第四世代のプラクティカ発表、ファインダー ネームプレートのデザイン変更、 設計はベーム、<br>プラクティフレックスの名称消滅 |
| | **09 /20** | **ソ連 ドイツ民主共和国(東独)主権回復協定に調印** |
| | **10 /01** | **米英仏、東独不承認をソ連に表明** |
| | **12 /09** | **ドイツ連邦共和国(西独)、東独承認国との国交関係を拒否** |
| 1956 | 03 | KW 第四世代のプラクティカに自動絞り追加 |
| | 04 | ＺＩ/KW コンタックスＥ/ペンタコンＥ発表、マークはエルネマンタワーに統一、<br>ツァイス･イコンのレンズマークが消えた |
| | 09 | ＺＩ/KW コンタックスF/ペンタコンF発表、ファインダー光学系が一新され明るく見やすくなった。<br>半自動絞りの導入<br>ＺＩ/KW コンタックスFB/ペンタコンFB発表、Fに非連動の外部セレン露光計追加 |
| 1958 | 09 | ＺＩ/KW コンタックスFM /ペンタコンFM発表　Fのファインダーにスプリットイメージ追加 |
| | | ＺＩ/KW コンタックスFBM /ペンタコンＦＢＭ発表、Fに非連動型の外部セレン露光計、スプリットイメージ追加 |
| 1961 | **08 /13** | **東独 東西ベルリンの境界を封鎖** |
| 1989 | **11 /09** | **東独 東西ベルリンの境界にある検問所を開放** |
| | **/10** | **ベルリンの壁破壊が始まる** |
| **1990** | **10 /03** | **ドイツ統一 、国名はドイツ連邦共和国、首都はベルリン** |

注： **ゴシック体は史実**、明朝体はカメラ界イベント


参　考　文　献

東ドイツカメラの全貌:リヒァルト･フンメル、リチャード･クー、村山昇作　朝日ソノラマ
ツァイス 激動の100年:アーミン･ヘルマン中野不二雄訳　新潮社
Practiflex:Alexander Schulz　LINDEMANNS VERLAG
Contax S:Alexander Schulz　LINDEMANNS VERLAG
昭和･平成史年表:　平凡社編